

氏名	Ruijters Vincent
ヨミガナ	ライタス ヴィンセント
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第641号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 Intimacy as Aesthetics:Morphology and Modifications（美学としてのインティマシー 解体論と変形）
	〈作品〉 Breathing IN/EX-terior Dynamics of Mass Connectivity Untitled(Swing)
	〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	八谷 和彦
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	伊藤 俊治
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小谷 元彦
（副査）	東京藝術大学	教授	（国際芸術創造	長谷川 祐子
			研究科）	
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	
（副査）			（	

（論文内容の要旨）

研究課題

1. 芸術作品に通底するインティマシーはどのような現れ方があるか？
2. インティマシーは創作過程と作品体験にどのような役割があるか？

目的

私はインティマシーの審美的現象を探求し、美術作品から得られるインティマシーの特異性を定義し、分類する。

その結果を使い、美術作品におけるインティマシーの現象学的なモデルを作り上げることを本稿では目的としている。この研究の理論の解釈を交えながら、芸術制作に反映している。

1-1 インティマシー性の定義

美術作品から得られるインティマシーをさぐる前に、まず人間同士におけるインティマシーを定義する。そのために、心理学と現象学の分野からの研究結果を援用する。

1-2 作品から得られるインティマシーの特異性

人間関係におけるインティマシーと美術作品から得られるインティマシーの差分を探る。第1章に書いた人間同士におけるインティマシーと、美術作品から得られるインティマシーを比較することで、作品から得られるインティマシーの特異性を定義することを試みる。美術作品に固有な特異性は、筆者が類型として定義し命名した。この得意性は「フィクショナル自己開示」、「追体験なインティマシー」、「追体験なインティマシー」、「ロールプレイド関係」、「不協和的なインティマシー」、「代理的なインティマシー」、「公開的な排他性のパラドックスである」。

2-1 インティマシーの変数

この研究では、インティマシーとその基本変数の形態を考察する。インティマシーは「自己開示」、「距離感」、「排他性」という変数に分けることができる。

2-2 インティメイト・アートの役割

インティメイト・アートの役割は「記録」、「ファシリテーター」、「リフレクター」というに分けることができる。

3 本研究結果をもとにしている作品

《Breathing Paper》は、作家が日本に拠点を移してからスケッチブックに書き溜めているメモ書き、スケッチ、テキスト、詩などのドローイングやコラージュ、日々の生活を写し取ったスナップといった作家の「私」の集積といえるオブジェを、洗濯物用ハンガーに吊るした作品である。

《Untitled (Swing)》は、ブランコ型のインタラクティブ作品である。このブランコの座面部分は、剃刀の刃で覆われている。天井部分には蛍光灯がついており、鑑賞者が作品の前を通ると、この蛍光灯が点灯し、この剃刀の鋭利な刃を照らし出す。そして蛍光灯の点灯と同時に、「モスキート」と呼ばれる高周波の不快感が空間に響く。

《Dynamics of Mass Connectivity》は、3面モニターのインタラクティブ・インスタレーションである。1つの支柱を中心として3面に別々のモニターがついて回転しており、国内外在住の作家と親しい人物がビデオ通話している様子が映し出されている。鑑賞者が作品に近づくに従って、このモニターの回転速度は上昇し、モニターに映し出されている人の顔は徐々に判別不可能になる。本作では、情報テクノロジーによって媒介されるコミュニケーションの過剰によって、親密な会話ですら逆説的にノイズ化し不在化していく様相が示されている。

《Breathing IN/EX-terior》は、大きな布によるインスタレーション作品である。この布の構造体は、展示空間に設置されている送風機によって揺れ動く。布のテクスチャやマテリアリティ、風や照明のプログラミングによって、本作は鑑賞者を包み込むような柔らかい体験、すなわち作家の追求するインティマシーを生み出す。また、会場全体を構造化した本作品は、作家の呼吸音とも同期されている。こうした布、風、音、光のコンビネーションにより、鑑賞者は展示空間にありながら、作家の体内に潜り込んでしまったかのような感覚に陥ることとなる。

結論

インティマシーはアーティスト、芸術作品、鑑賞者という3つの要素のお互いの審美的浸透に影響を与える。インティマシーは、鑑賞者を「鑑賞」から「感情的な参加」へと誘う方法である。インティマシーを適用することで、鑑賞者の内的プライベート空間や感情的な空間へ作品がアクセスすることが可能になる。この内的プライベート空間や感情的な空間の中にインティマシーのパラメーターが含まれている。

逆にアーティストが鑑賞者を自分の内的プライベート空間や感情的な空間へアクセスさせるためにインティマシーを使用する場合もある。

一方で「不協和的なインティマシー」は鑑賞者を深い思考へと誘う方法である。この思考はインティマシーの持つ性質と関係がある思考である。不協和的なインティマシーは、鑑賞者が芸術作品を再解釈する、また提示されるものの背後にあるより深い（より抽象的な）意

インティマシーはこのように知的な、あるいは感情的な参加を引き付ける磁石のように機能する。

（論文審査結果の要旨）

「インティマシー Intimacy」は、定義づけの難しい、厄介な言葉である。それは多義性を孕み、関係により揺れ動き、定着したと思った途端にたちまち逃れ出てゆく流動性を持つ言葉だからだ。

ヴィンセント・ライタスの博士論文「美学としてのインティマシー 解体論と変形」は、その「インティマシー」を美学として捉え、近現代美術史に位置づけようとする。

19世紀末から20世紀初めのナビ派等に見られる、寝室や居間などの私生活に於ける親密さを扱う風俗画的な傾向から、ニコラ・ブリオーが「関係の美学」という言葉で表そうとした、コミュニケーションを核とする21世紀の現代美術の流れまで、「インティマシー（親密さ、関係性）」という言葉により照らし出される美学

の特性を浮き彫りにしようとする論考である。

20世紀半ばにマルセル・デュシャンは、「アーティスト」「作品」「鑑賞者」という三つの要素の関係と交換の形式を「芸術係数」という言葉で表そうとしたが、本論ではその三つの要素がもはや固定されたものではなくなくなっていることが明らかにされ、芸術係数に代わるべき新たなパラメータが模索されている。

作品の表現形式は既に物質的な制約に縛られることはなく、鑑賞者の位置もファシリテーターやアバターの存在により可変性を帯びる。AIやネットワークの進化により人間の意識も変質し、共同体や社会のあり様も大きく変わってしまった。つまり「インティマシー」も新たな要素を複合的に組み入れながら、美的次元から再統合してゆく必要に迫られていると言えるだろう。

本論文はそうした視点に立ち、インティマシーを解放性、伝達性、距離感、排他性といった視点から再考し、このような変数が増え変化してゆく何が起こってくるのかを自作も含め検証しようとする。

理論化や構造化のため論旨や筋道が荒くなってしまっているが、これまで精緻に分析されることのなかった領域を包括的に論述しようとする姿勢は評価したい。「インティマシー」の変容の背後には人間概念の質的变化が映し出されている。その問題提起としても重要と考える。以上の理由から本論文を合格と判断した。

(作品審査結果の要旨)

ヴィンセントライタスの提出作品は、呼吸を模したファンによって大きな布を動かす作品「Breathing IN/EX-terior」と本人のスカイプ記録が使用された回転するモニター作品「Dynamics of Mass Connectivity」の二つで主に構成されている。

論文ではインティマシーという親密な人間関係でのメタコミュニケーションを主題として取り上げ、19世紀のアンティミズムへアプローチし、「関係性の美学」および現代美術における表現まで繋げて捉えなおしながら、カテゴライズ、図式化するという意欲的な展開だったが、その分類化によって、言語化や物質を超えたインティマシーの正体を探ることが難しくなってしまった側面があるとは考えられた。しかしながらインティマシーという概念は、SNSツールの出現によって、現代のコミュニケーションの中で更新されているだろう。深い関係性を意味するインティマシーが変化している状況に着目し、作品に援用することは興味深い展開であり、今後の研究活動への礎として十分なものであると判定できた。

では二つの提出作品の配置と内容を考察していく。「Breathing IN/EX-terior」の垂れ下がる布は、参拝する通路の壁のように設置されている。その通路を抜けると奥に「Dynamics of Mass Connectivity」が見えるが、鑑賞者が近づけば、近づくほどオブジェクトのモニターの回転が加速し、画面に映る顔が判別不能になっていく。皮膚のような「Breathing IN/EX-terior」は物理的接触作品として、「Dynamics of Mass Connectivity」はヴァーチャルコミュニケーションが物理的接触を不可能であることを暗示しており、対比が効いている。この配置が、まるで非科学的な領域である願いを叶えるために参拝に訪れた人間へ「包容」と「拒否」の戸惑いを同時に与えるような体験となっているのは面白い。

特に「Dynamics of Mass Connectivity」の作者のプライベートのスカイプ通話記録の親しみある顔が、モニターの回転によって、抽象化していくことはアンビバレントな感情を喚起させるものだった。たくさんの顔が高速回転により、シャッフルされ、会話の輪郭線も消え失せ、なぜか目だけが残像として残る。そのデフォルメ化された顔は滑稽であり、現代のインティマシーを象徴しているかのようだ。また「Breathing IN/EX-terior」のファンの設定は男性と女性の呼吸が対となり、残り2つは布を動かす補助的な役割がある。さらにそれらは4つのパターンへと変化する。男性と女性の呼吸はゆったりから興奮するような激しいものまでプログラミングされているのだが、それらの設定がややわかりにくく、効果的に作用していないのは残念ではあるものの、ファンによって両サイドの布が内側に膨れ上がり、キスするような形になり、突如インティマシーが出現する。このふとした接触こそインティマシーの正体のようにも思えた。

これまでインティマシーというテーマは19世紀を除けば、作者の考察した現代においては「場」を持って作品化した例がほとんどだったが、生命体のような動くオブジェクトとして扱い、捉え直すことは試みとしては新鮮であり、今後現代のインティマシー表現の深みへ到達することも期待できる。論文と作品の相互関係の密度も高く、ヴィンセント・ライタスは博士過程取得に相応しいと判断する。

(総合審査結果の要旨)

Vincent Ruijtersは、「親密さ（インティマシー）や関係性」を主題として、体験型の作品を作ってきた。彼の修士時代の作品は、恋人との関係性を、風を起こす装置と時間によって変わる「風の楽譜」によって、その心理状態を観客に追体験させる体験型装置として作成された。本学における博士課程での研究では、ニコラ・ブリオーの「関係性の美学」以降、リレーショナルアートやパフォーマンスアートなどにおいて頻繁に見られる「インティマシー性」を構造化・分析することを主題と定め、心理学・現象学的なインティマシー性との差分から、美術作品における固有のインティマシー性の現れ方を定義、分類し、芸術作品に通底するインティマシーの現象学的な様相を「フィクショナル自己開示」「追体験なインティマシー」「ロールプレイド関係」「不協和的なインティマシー」「代理的なインティマシー」「公開的な排他性のパロディ」などに分類し、モデル化した。またインティマシーさを決定する変数を考察し、インティメートアートが取りうる形態や役割を定義した。

作家自身により東京の駒込倉庫ギャラリーで開催された個展「Breathing IN / EX-terior」では本研究をもとにした作品を制作、発表しており、2019年12月の博士展では、個展の中で制作された作品から《Breathing IN/EX-terior》《Dynamics of Mass Connectivity》《Untitled (Swing)》を展示し、自身の研究とリンクした制作活動を会場で具体的に表現してみせた。《Breathing IN/EX-terior》は、大きな布によるインスタレーション作品であり、やわらかな布のテクスチャや、風や照明のプログラミング、作家の呼吸音を録音したサウンドによって鑑賞者が作家の体内に包み込まれたような体験を作り出した。3面モニターが回転する、インタラクティブ・インスタレーションである《Dynamics of Mass Connectivity》では、国内外に住む作家の友人、家族とのスカイプ会話が、鑑賞者が近づくにつれて早くなるモニターの回転速度によって、モニターに映し出されている人の顔が徐々に融合していくことで、ソーシャルメディアなど現在のインターネット環境が私たちの生活に与える影響で発生する不協和的なインティマシーの状況を表現してみせた。また《Untitled (Swing)》は、博士展では映像作品として展示されたが、本来はブランコ型のインタラクティブ作品であり、刃に覆われた子供用のブランコ、明滅する蛍光灯、若者を遠ざけるモスキート音といった「冷たい」要素によって「公共」と「私たち」の間で発生する敵対的な「インティマシー」とは正反対の状況を通して見つめることで、私達をとりまく包摂と排除の間を揺れ動く世界を表現してみせた。

インティマシー性の現れ方を構造化・モデル化する論考では、包括的にモデル化しようとする試みが実際に作られたインティマシー性を持つすべての作品に対して適用可能かどうかなどの疑問は残るが、モデル化しようとするその姿勢自体は重要と判断し、また作品に対しても現代の私達の環境を照射するような優れた作品として成立したと評価し、博士審査を合格とした。